島根大学教育学部紀要（教育科学）第5巻　205—233頁　昭和46年12月

学童の低体位地区に関する比較研究（Ⅰ）

福井一明・團　琢磨
織奥信男・喜多村　望

Kazuaki FUKUI・Takuma DAN・Nobuo ORIOKU and Nozomu KITAMURA：
A Comparative Study on the Physical Development
of School Children in Sanin District.　（Ⅰ）

Ⅰ　研究課題及びその視点

児童のもつ身体的資質が最大限に発揮できるように，その実現にむかって可能な努力を払うことは，生活ならびに教育機能の重要な部分である。

体力は，こんにち，人間の具備すべき基本的な価値及び能力として広く認識され，その科学的研究も推進されている。したがって，このような価値，能力の実現を目標とする体位乃至体力向上[※註]の課題は，既に学校教育は勿論，社会教育，スポーツ活動，文化活動などの中にかなり明瞭に位置づけられ，随所でその実践が試みられている。

1．今回，われわれは，表題に示す通り，児童の低体位性について，その基盤や背景を地区のレベルで把握し，比較検討することにした。

体位・体力については，個人差が存在することと同様に地域差があること，およびその発達の型に特性がみられるなど，これまで多くの身体発達に関する研究や諸統計資料によってみることができ，それに関与する作用要因についても明らかにされている。

要約的にみると，児童の体位の変動に対する作用要因として次の事項が示される。

(1)　歴史的に，社会・経済的，文化的諸条件の変動（経済的不況，伝染病の流行など）

(2)　生活環境，社会環境の変化（とくに栄養の改善を中心とした）

(3)　国民の健康状態の改善

(4)　生活様式の近代化，生活水準の向上

(5)　健康や身体の発育（児童，栄養，運動）に対する知識の増大にともなう生活意識水準の向上ならびに行動の質的改善

(6)　体育・スポーツの普及

これらはしかし，要素的，因果的に個々独立のものではなく，生活次元の中に物的，精神的，制度的，方法的，技術的観点から統合的に理解されるものである。

われわれは，特に前掲の原則を低体位性研究の視点とした。

2．多くのへき地及びへき地的性格の地域を擁する島根県の場合，児童の発育水準が県平均において全国平均を下廻る成績を示している。

同時に，県内の児童体位の分布の傾向も，その地域の規模とほぼ平行した関係にあるとみることができる。文部省統計報告書にも示される通り，全国平均とへき地の児童の体位の差異は，恒常的傾向をあらわしており，同時に都市と農村部の較差は固定的な様相を呈している。

島根県においても，このことは例外ではなく，へき地部は更に県平均をも下廻る傾向が強い。しかしながら，こうした地区の低体位性は，必ずしもへき地部に限定されるものではなく，都市周辺部にさえ認められる。

このような児童の低体位性に作用する基本条件を，1.に述べた地域に共通する生活構造の特性として関連することを前提しながら，児童体位の発達過程に作用する間接的条件の実態と意義を見出すことに今次調査研究の基底をおいたのである。

※註

体位と体力

人間の「からだ」を理解の対象とするとき，その現実的目的や意図―期待する効用―によって，種々の観点が成立する。近時，体育学領域で用いられている「体力」は，英語でいう physical fitness に相当し，人間のからだに関する諸属性の統合的把握を意味している。このような統合的概念で示される体力は，また人間の基本的な「能力」であるとされる。

「体力は，体の構造や健康状態できめられる。体の成り立ちと状態をもとにして，体があらわす能力を示すものである――中略。体力の指標となるものは形態および肉体機能，精神機能，健康状態の特徴を示す観測可能なあらわれの四つである。」と規定して体力の客観的把握，評価の条件が具体的に示されている。また，福田邦三教授は，身体に要請される課題に対応するものとして，体力を防衛体力と行動体力に分け，前者を生存および健康をおびやかす自然界の侵襲に対する生体の防衛能力を問題にし，後者はスポーツや労働などの場面から要請される身体的―精神的も含めての―効果に対応させて捉え，両者が密接に関連することを述べておられる。このように体力概念は，人間のあらゆる要素を統合した複雑な内容を含んでいるが，本稿でいう「体位」は，児童の「からだの大いさ」に関するものであり，その基本的理解の立場は，体力概念としての統合的な身体的能力を構成するひとつの要素として位置づくものである。

体位はその理解において，必ずしも明確なものではなく，概念のあいまいさを伴うが，上述の位置づけから，ここでは特に「身長，体重，胸囲等（体格）の発育水準をあらわす」ものとして，そのまま慣用する。

＜引用・参考文献＞　体力測定　名取礼二・横堀栄・小川義雄著　同文書院　昭.37年
日本人の体力　福田邦三編　杏林書院　昭.43年

Ⅱ　調査対象地区及び対象者

1.　地区の抽出手順

地区の選定は次の観点や規準にもとづいておこなわれた。すなわち；

(1)　島根県における児童の身体発達の計測値の平均値（昭和44年度）と任意の範囲の各小学

校区児童のそれを対比させ，県平均に比して全般的に劣るものを抽出し，

(2) とくに全校児童の在籍数の規模が著しく小さいものを除いて第3表に示す対象人口（保護者）を確保した。

(3) 比較対照地区は，前者に比べて体位は比較的優位性は示すが，地理的・社会的に立地条件が「いわゆる低体位地区」に類似し，児童の人口規模も略々等しいことが考慮された。

(4) したがって抽出された個々の地区は，総じて共通な地域的性格をもつが，調査範囲の地理的拡がりにおいて，多分に任意的抽出の傾向をもっており，ひとつの事例としての性格をもつ。（図1）

2. 調査対象者

調査対象者は，それぞれの小学校における児童の保護者全員とし，原則的に両親またはそれにかわるものとした。

対象者数の内訳の主なものは第3表，調査対象の職業別分類に示し，対象地区全体の特性から，その考察の規準を農業及び非農業者群の二群に分け，性別に対照させた。表に示す地区の配列順序は，体位が比較的に低位であるとみなされた地区群を上欄に，優位群を下欄に置いて各地区を両群の順位にしたがって対応的に観察できるようにした。

3. 地区の概況

(1) 大田市池田地区は，大田市の南山岳部，国立公園三瓶（さんべ）山の山麓西北部に位置し，人口1,475人，農林業従事者66.3%の純農山村である。

(2) 大田市志学（しがく）地区は，池田地区と同様，三瓶山の麓南東部，海抜約400米に位置し，人口1,284人,農林業従事者61.0%である。古くから交通の要衝として開け温泉資源に恵まれ，その有利な立地条件から，近来スキー場，キャンプ場の整備，旅館，保養施設の増加，観光道路の開発など三瓶山観光資源の綜合的開発とともに急速に地区の変貌を遂げつつある。また三瓶山一円の地形，資源を利用して酪農，牧畜も盛んである。

(3) 邑智郡羽須美村口羽（くちば）地区は，村行政，交通等の中心部である。江の川の上流，出羽川，長田川の流域にあって広島県と県境を接する。人口1,801人，農林業従事者65.5%，農林業を主産業とするが，耕作経営規模は零細である。三江南線に沿って三次市への交通が開け，広島県への通勤者も多く，文化・経済交流も主として広島の圏内にある。

(4) 松江市持田地区は，市の東北部郊外に位置し，北は島根半島の北山々系を背景にして，南に平坦な水田地帯を介して市街地に接する。

人口2,204人，農林業従事者64.0%，水稲中心の農業を主としながらも，市街地に隣接するため通勤者が多く，近年，いわゆる新興住宅の増加にともなって住宅地域としての性格をつよめている。

(5) 邑智郡石見（いわみ）町中野地区は，島根県有数の平野部である矢上(やかみ)盆地の中央部に開けた純農村部である。人口1,775人，農林業従事者49.1%，豊かな自然に恵まれ，

米作のほか養蚕，酪農および煙草の栽培が盛んである。町の中心である矢上に隣接し，この地方一帯の交通の要路をなしている。

(6) 飯石（いいし）郡吉田村吉田地区は，中国山地，国道54号線から地方道を経ての山間部に位置し，山林面積が多く耕地は狭少であるが，豊かな山林資源を擁するため，古くから林業が主産業をなしている。近年，とくに交通事情の改善とともに文化遅滞を急速にとりもどしつつある。人口1,759人，農林業従事者は72.0%である。

(7) 松江市秋鹿（あいか）地区は，宍道湖の北岸，市の西北部に位いし，湖北部の要路にあって，北は島根半島の山麓から湖岸に向って南に開けた耕地を有する。水田・畑作を中心とする純農村的性格をもちながらも，その立地条件から市街地への通勤者も多く，近年，林産物加工々場，縫製工場等の進出にみられるように，湖北部開発とともに今後の発展が予想される。人口2,884人，農林業従事者44.0%である。

4．調査対象地区及び対象者についての考察

地区の概況で述べたように，地区のすべてが農村及び山村部であるために，農林業従事者の人口比率がたかい。その大部分が，水稲，煙草，林産物の生産を労働内容の主軸としながらも，一部を除いて概して経営規模が零細であり，労働力の不足と生産性の低さが共通している。

基本的に，地区の生産基盤の弱さ――生産資源および立地条件などの不利――は，地区住民の社会的・経済的生活条件の需要を満たすことができず，結果的に新規学卒者をはじめ，若年及び基幹労働力を域外に流出させ，いわゆる過疎化現象を助長している。

したがって，相対的に人口の老令化の進行が著るしく，生産年令層の減少とともに学校における児童数の急激な減少を招来している。（第２，４表）

全般的に，昭和35年から昭和40年にいたる５年間の児童数の減少の傾斜がとくに著るしく，地区全体の人口の推移状況（第１表）にほぼ平行している。

調査対象者は，校区児童の保護者に限定されたために，その殆んどが30～50才未満者で占められている。（第５表）このことは，今回の調査結果において，年令階層に由来する特異性を顕著に表わすことがあるかも知れない。しかしその中堅的，若年的感覚を反映するとしても，それが直ちに地区全体の支配的条件とはなりえないと思われる。前述のように，人口の老令化は保守的傾向を温存・助長しやすい素地を必然化し，住民の意識・行動の側面に影響することも考えられる。

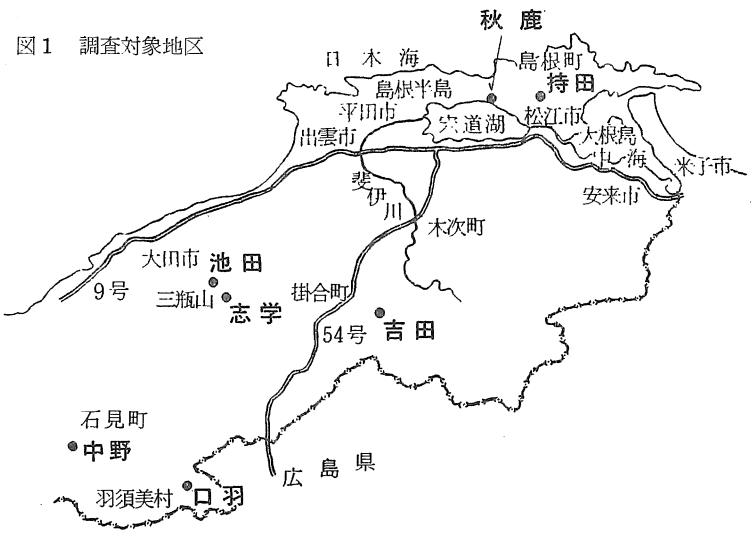
特に農業従事者は，本業および地域産業に経済的収入を依存することが困難となるため，兼業化の進行と並んで，いわゆる出稼および臨時的労務（日雇）によって労働収入を補う傾向が次第に強まっている。

ここでは，出稼については男子に限定し，臨時雇は男女の実態を示した。（第６表）地区的にみると，志学，持田，吉田の三地区の出稼の割合が小さく，池田及び秋鹿の両地区がとくに高くなっている。

Ⅲ 調 査 結 果 の 考 察

調査は主に質問紙法を中心に，直接現地踏査（昭和45年10月―11月）による資料をもってあてられた。内容の構成は，調査における地区に関する基礎的事項のほか，生活の時間的構造，余暇利用の実態，スポーツ活動，地区の保健活動，学童の生活及び身体的条件に関する観察を中心とする家庭（保護者）の認識水準など，主として地区住民の生活における意識・行動の側面について実践的見地から構成された。

図1　調査対象地区



第1表　人 口 の 推 移

	S.30 年		S.35 年		S.40 年	
	人口	指数	人口	指数	人口	指数
島 根 県	929,066	100	888,886	95.7	821,620	88.4
松 江 市	103,771	100	106,476	102.6	110,534	106.5
池　田	2,135	100	1,824	85.4	1,564	73.3
志　学	1,667	100	1,650	99.0	1,418	85.1
口　羽	2,985	100	2,651	88.1	2,105	70.5
持　田	2,437	100	2,349	96.4	2,204	90.4
中　野	1,924	100	1,818	94.5	1,568	81.5
吉　田	(4,963)	100	3,091	62.3	2,698	54.4
秋　鹿	3,361	100	3,141	93.5	2,964	88.2

第2表　調査地区における年令別人口構成比（%）

	0～14才			15～29才			30～59才			60才以上		
	S30	S35	S40	S30	S35	S40	S30	S35	S40	S30	S35	S40
島根県	35.2	31.9	26.6	23.2	21.6	21.3	30.0	34.2	38.1	11.6	12.3	14.0
松江市	30.3	27.1	23.9	28.5	28.0	28.7	32.0	34.7	38.4	9.2	11.0	8.2
池田	—	32.7	25.7	—	17.1	15.2	—	36.7	42.9	—	13.5	16.1
志学			25.7			15.9			42.7			15.7
口羽	34.2	32.3	26.5	20.4	16.6	14.1	32.2	35.2	39.6	13.2	15.9	19.8
持田	34.7	30.9	26.2	26.0	24.3	24.0	30.0	33.2	35.9	9.3	11.6	13.9
中野	33.9	38.0	25.1	20.2	15.6	16.6	34.9	32.4	39.9	11.0	14.0	18.4
吉田	(36.7)	35.6	30.7	(24.6)	20.2	16.3	(28.2)	31.9	38.3	(10.5)	12.3	14.7
秋鹿	34.8	32.3	27.0	23.7	21.7	21,8	29.4	32.7	36.5	12.1	13.3	14.7

（池田・志学のS35年人口は旧村のものである）

第3表　調査対象者の職業別分類(主なもの)（%）

	農業男子							農業女子						
	池田	志学	口羽	持田	中野	吉田	秋鹿	池田	志学	口羽	持田	中野	吉田	秋鹿
人数（人）	30	30	40	54	35	60	30	56	53	55	79	61	75	73
%	44.8	46.9	43.0	49.5	39.3	49.6	30.9	67.5	67.9	59.1	66.9	59.8	62.0	62.4
	非農業男子							非農業女子						
	池田	志学	口羽	持田	中野	吉田	秋鹿	池田	志学	口羽	持田	中野	吉田	秋鹿
人数（人）	37	34	53	55	54	61	67	27	25	38	39	41	46	44
%	55.2	53.1	57.0	50.5	60.7	50.4	69.1	32.5	32.1	40.9	33.1	40.2	38.0	37.6

第4表　児童数の推移

	池田小		志学小		口羽小		持田小		中野小		吉田小		秋鹿小	
	人数	指数	人数	指数	人数	指数	人数	指数	人数	指数	人数	指数	人数	指数
S.31	310	100	237	100	124	100	353	100	392	100	362	100	389	100
S.35	296	95.5	224	94.5	115	92.7	331	93.8	334	85.2	385	106.4	368	94.6
S.40	171	55.2	174	73.4	75	60.5	241	68.3	190	48.5	239	66.0	242	62.2
S.45	130	41.9	128	54.0	79	63.7	200	56.7	150	38.3	185	51.1	182	46.8

第5表　調査対象者の年令・学歴構成

	人	(N)	20才未満	20～29才	30～39才	40～49才	50～59才	60才以上	旧小・新中卒	旧高・新高中卒女卒	大学卒	不明
大田市池田	農男	30		3.3	50.0	36.7	10.0		66.7	30.0		3.3
	非農男	37			64.9	29.7	2.7		35.1	32.4	10.8	2.7
	農女	56		9.0	66.1	16.1			73.2	19.6		7.1
	非農女	27		3.7	81.5	14.8			44.4	44.4	7.4	3.7
大田市志学	農男	30			46.7	36.7	16.7		76.7	16.7	6.7	
	非農男	34			50.0	41.2	2.9	2.9	50.0	35.3	14.7	
	農女	53		1.9	64.1	32.1	1.9		67.9	20.8	1.9	9.4
	非農女	25			68.0	16.0	12.0	4.0	52.0	32.0	12.0	4.0
羽須美村口羽	農男	40			35.0	55.0	5.0	5.0	70.0	22.5		7.5
	非農男	53			49.1	47.3	3.8		51.0	34.0	13.2	1.9
	農女	55		3.6	58.2	32.7	1.8		80.0	20.0		
	非農女	38		2.6	76.3	21.1			42.1	47.4	10.5	
松江市持田	農男	54	1.9		53.7	35.2	3.7		46.3	38.9	0	14.8
	非農男	55		3.6	47.3	36.4	3.6		50.9	40.0	1.8	7.3
	農女	72		1.4	69.5	23.6	1.4		58.4	33.4	0	8.3
	非農女	39		5.1	74.4	17.9			48.7	43.9	0	7.7
中野	農男	35			54.3	34.3	5.7	2.9	71.5	20.0		8.6
	非農男	54		1.9	51.8	40.7	5.6		48.1	37.0	11.1	3.7
	農女	61		6.6	70.5	16.4	3.3		64.0	27.9	1.6	6.6
	非農女	41		7.3	65.9	19.5	2.4		48.8	43.9	7.3	
吉田	農男	60		1.7	50.0	41.8	6.7		88.5	8.4	1.7	1.7
	非農男	61			50.8	42.6	4.9		57.4	39.3	3.3	
	農女	75		2.7	74.7	20.0			85.3	10.7		4.0
	非農女	46		4.3	76.0	15.2	2.2		56.4	32.6	4.3	6.5
松江市秋鹿	農男	30			46.7	46.7		6.7	70.0	26.7	3.3	
	非農男	67			50.7	41.8	6.0		58.2	34.3	4.5	3.0
	農女	73		1.4	74.0	21.9			64.4	32.9		2.7
	非農女	44		4.5	65.8	27.2	2.3		59.0	38.6	2.3	

第6表　農業従事者の出稼と臨事雇の実態(%)
（1年間に従事した者）

	出稼	臨時雇	
	男子	男子	女子
池田	36.7	56.1	33.9
志学	10.6	26.7	28.3
口羽	25.0	47.5	25.5
持田	13.0	48.1	26.4
中野	25.7	25.7	23.0
吉田	16.7	43.3	12.0
秋鹿	30.0	46.7	19.2

非農業者(17.4)…吉田地区

1．生活の時間的構造と余暇活動

(1) 生活活動の調査方法

生活時間についての調査方法の手続きは，習慣的生活活動とその活動に費された時間の調査と，特定日におけるそれらの調査に区別することができる。

この調査においては，たとえば「あなたはふだん1日へいきんなん時間ぐらいはたらきますか」のようにたずね，調査者が時間の区分を規定する習慣調査によって行なった。さらに，余暇活動については，「余暇とは何か」という概念についての解釈が被調査者によってまちまちであることから，調査者があらかじめ余暇行動を設定しておいて，それらの行動のうち，習慣的に行なうものをたずねた。

(2) 生活の時間的構造

＜仕事の時間＞

わが国の労働時間は，全体の平均ではここ10年ぐらいのあいだにやや短くなった。労働省の「毎月勤労統計」によってみると，昭和35年は1か月平均203時間，それが44年では190時間に，つまり1日あたり約30分減少している。また，NHKの「国民生活時間調査1970年」では，就業者全体の平日における平均労働時間は8時間弱で，10時間以上働いているものは，農業従事者で約3割となっている。

この調査における「仕事の時間」は，全体としてみると，8～10時間とするものの割合が最も高率で，男女差が顕著に現われている。男子で10時間以上働いているものは，中野地区を除けば2割弱であるが，女子では10時間以上働くものが半数以上を占め，また広がりも大きい。これを昭和37年に実施した同種の調査と比較した場合，女子の仕事の時間は，むしろ長くなっているように思われる。

これを職業によってみると，男子では農業従事者が長い。しかし，女子については，それぞれの地区でみると，秋鹿と池田を除く他の4地区では，農業より非農業に長時間はたらくとするものの割合が高くなっている。

第7表　仕事の時間
—女　子—　(%)

		(N)	6時間以下	6〜8時間	8〜10時間	10〜12時間	12時間以上
農業	池田	56	1.8	17.9	30.4	23.2	23.2
	口羽	55	1.8	10.9	38.2	36.4	12.7
	持田	72	2.8	25.0	44.5	13.9	12.5
	中野	61	0	8.2	41.0	36.1	11.5
	吉田	75	0	10.7	30.7	28.0	28.0
	秋鹿	73	2.7	6.8	32.9	32.9	21.9
非農業	池田	27	7.4	11.1	33.3	25.9	14.8
	口羽	38	5.3	2.6	34.2	28.9	28.9
	持田	39	5.1	23.1	33.3	23.1	12.8
	中野	41	0	12.2	29.3	31.7	24.4
	吉田	46	2.2	13.0	34.7	32.6	17.4
	秋鹿	44	2.3	18.2	36.3	18.2	22.7

第8表　農業従事者のすいみん時間
(%)

		(N)	6時間以下	6〜7時間	7〜8時間	8〜9時間	9〜10時間	10時間以上
男子	池田	30	6.7	20.0	43.3	23.3	6.7	0
	口羽	40	2.5	27.5	27.5	27.5	10.0	2.5
	持田	54	1.9	11.1	35.2	40.7	9.3	1.9
	中野	35	2.9	28.6	42.9	20.0	5.7	0
	吉田	60	0	8.4	53.4	28.4	8.4	0
	秋鹿	30	0	20.0	40.0	30.0	0	3.3
女子	池田	56	0	25.0	42.9	25.0	5.4	1.8
	口羽	55	1.8	41.8	32.7	18.2	1.8	1.8
	持田	72	0	9.7	52.8	26.4	7.0	0
	中野	61	3.3	23.0	45.9	21.3	1.6	0
	吉田	75	0	36.0	37.3	20.0	1.3	4.0
	秋鹿	73	0	28.8	45.2	19.2	4.1	0

＜すいみん時間＞

すいみんは6〜9時間に90%のものが含まれている。仕事の時間と同様，男女差が明確である。6〜9時間を両極とする時間帯の中で，都市近郊の2地区（秋鹿，持田）を除く他の4地区では，6時間の極に比重が傾斜している。職業別にみると，男女ともに農業従事者のすいみん時間が他と比べて長く，この傾向は地域差を認めがたい。

＜余暇時間＞

NHKの昭和45年の生活時間調査によれば，平日の日本人の平均余暇時間は約3時間半といわれている。この調査では，全体として1〜2時間とするものの比率が最も高く，いわゆる「自分の自由にできる時間」として意識にのぼる時間量は少ない。

余暇時間における男子の職業による差は少ないが，女子では農業従事者とそれ以外のものとの差がかなり明確にあわれている。これは，必ずしも農業従事者に短いというのではなく，地域別類型によってちがったタイプを示している。すなわち，池田，口羽，持田（いわゆる低体位地区として抽出した地区）では非農業者が短く，中野，吉田，秋鹿（対照地区）ではこれと逆の様相を呈している。

(3)　余暇とその活動

＜休　日＞

都市住民の生活リズムは，週単位の生活リズムが一般化しているのに対して，この調査からみた農村の生活周期のパターンは，なお不規則で，余暇と労働の未分化な状態にある。

調査対象の中で，1か月に2日以上の休日をもっているものは，非農業従事者男子で約5割，農業従事者では1か月に1日以上の休日をもつものが約半数で，残りの半数は休日をもってい

ない。たしかに，松江市近郊の二地域（秋鹿，持田）では非農業従事者の休日数は多くなるが，農業従事者においては定休日の所有率は低率で，他の地区との地域差は少ない。休日に視点をおいて住民の生活周期のパターンをみると，勤労と余暇はなお未分化であることを指摘できる。

第9表　農業従事者の余暇時間（%）

		(N)	1時間以下	1～2時間	2～3時間	3～4時間	4～5時間	5時間以上
男子	池田	30	30.0	30.0	16.7	16.7	6.7	0
	口羽	40	12.5	35.0	35.0	5.0	10.0	0
	持田	54	7.4	29.6	48.1	5.6	1.9	1.9
	中野	35	25.7	37.2	20.0	5.7	2.9	0
	吉田	60	8.4	45.1	31.7	6.7	1.7	0
	秋鹿	30	13.3	30.0	33.3	16.7	0	3.3
女子	池田	37	13.5	27.0	32.4	16.2	5.4	2.7
	口羽	53	11.3	20.8	39.7	18.0	1.9	5.7
	持田	55	7.3	23.6	34.5	12.7	14.5	3.6
	中野	61	21.3	34.4	21.3	9.8	0	3.3
	吉田	75	32.0	44.0	12.0	2.7	0	1.3
	秋鹿	67	10.4	40.3	20.9	14.9	6.0	4.5

第10表　非農業従事者の余暇時間（%）

		(N)	1時間以上	1～2時間	2～3時間	3～4時間	4～5時間	5時間以上
男子	池田	56	19.6	39.3	12.5	9.0	0	0
	口羽	55	29.1	43.6	16.4	5.5	1.8	0
	持田	72	15.3	41.7	26.4	8.3	1.4	1.4
	中野	54	18.5	29.6	33.3	14.8	3.7	0
	吉田	61	13.1	24.6	32.8	14.8	6.6	1.6
	秋鹿	73	21.9	41.1	32.9	2.7	0	0
女子	池田	27	22.7	22.2	25.9	3.7	3.7	7.4
	口羽	38	23.7	47.4	15.8	7.9	0	2.6
	持田	39	25.6	35.9	23.1	5.1	5.1	5.1
	中野	41	17.1	41.5	31.7	7.3	0	0
	吉田	46	8.7	32.6	36.9	13.0	2.2	0
	秋鹿	44	13.6	45.4	22.7	6.8	2.3	0

第11表　休日の余暇活動
—男子—（%）

		テレビ	新聞・雑誌	ねなどの休息ごろね・ひる	趣味活動	読書	ごすぶらぶらす	だんらん	仕事をする
農業	池田	36.6	16.6	13.3	3.3	3.3	0	10.0	10.0
	口羽	20.0	10.0	10.0	5.0	5.0	2.5	7.5	25.0
	持田	24.1	11.1	13.0	9.3	0	1.9	9.3	16.7
	中野	11.9	2.9	11.4	11.4	5.7	5.7	5.7	22.9
	吉田	6.7	0	28.4	0	0	6.7	8.4	13.4
	秋鹿	0	3.3	0	10.0	6.7	0	10.0	16.7
非農業	池田	21.6	10.8	18.9	10.8	2.7	13.5	24.4	13.5
	口羽	22.7	9.5	18.9	9.5	3.8	5.7	17.0	30.2
	持田	16.4	14.5	10.9	23.6	5.5	7.3	14.5	10.9
	中野	11.1	1.9	11.1	9.3	9.3	3.7	11.1	50.0
	吉田	16.4	9.8	19.7	8.2	3.3	6.6	13.1	39.3
	秋鹿	14.9	9.0	11.9	16.4	7.5	6.0	13.4	16.4

（1位と2位の回答を加算し，10%以上を記載）

第12表　休日の余暇活動
—女子—（%）

テレビ	新聞・雑誌	ねなどの休息ごろね・ひる	趣味活動	読書	ごすぶらぶらす	だんらん	仕事をする
12.5	0	7.2	3.6	7.2	3.6	23.2	10.8
10.9	5.5	9.1	3.6	7.3	1.8	14.5	18.2
12.5	4.2	2.8	7.0	0	2.8	19.5	7.0
8.2	3.3	9.8	9.8	4.9	3.7	14.8	18.0
10.7	4.0	6.7	5.3	1.3	0	16.0	16.0
5.5	1.4	5.5	2.7	0	0	17.8	13.7
14.8	0	3.7	11.1	0	3.7	22.2	29.6
18.4	5.3	7.9	7.9	2.6	5.3	26.3	23.7
20.5	0	5.1	15.4	0	2.6	23.1	10.3
17.1	0	2.4	24.4	7.3	4.9	19.5	24.4
15.2	10.9	6.5	2.2	4.3	0	23.4	23.9
13.6	2.3	0	6.8	4.5	4.5	15.9	6.8

（1位と2位の回答を加算し，10%以上を記載）

＜余暇活動＞

余暇利用という点からみれば，調査対象の余暇は夜に集中する平日のパターンに限られているために，その利用の特徴は，テレビ，新聞雑誌などの「気晴らし」と，ごろねなどの「休息」の比重が大きい。なかでも，労働の強度や密度が高い農業では，「休息」などの生理的疲労回復の占める割合が高い。

このように，労働によって生じた肉体的疲労を回復するための時間をレジャーに含めてよいだろうか。それは活動というより消極的利用の一形態である。つまり，これは労働によって生じた疲労が，生理的必需時間においてだけでは回復することのできないものの多いことを示している。この調査では選定されていないが，調査地区の年令構成からみて老令人口の占める割合が多いことを併せて考えたとき，住民の余暇活動はもっと休息型に傾斜するであろう。

ところで，定期的な休日をもたないということは，ある程度まとまった余暇活動をもたないことにもつながる。すなわち，読書，趣味活動，スポーツなど，ある程度まとまった時間を必要とする社会的・集団的・余暇活動の生活化はその中からは生まれてこない。さらに，余暇には「仕事」をするという傾向が，休日には一層高率を示すということは，何を意味するものであろうか。「寸暇を惜しんではたらく」という労働を美徳とし，遊びを罪悪とする生活の倫理は，なお　生きつづけ，余暇と労働の未分化の様相をみごとに露呈させているといえよう。

第13表　週日の余暇活動
―男子―（%）

		テレビ	新聞・雑誌	ごろねなどの休息	趣味活動	読書	だんらん	仕事をする
農業	池田	36.6	16.6	13.3	3.3	3.3	10.0	10.0
	口羽	65.0	17.5	17.5	7.5	15.0	10.0	2.5
	持田	63.0	44.4	11.1	5.6	5.6	1.9	1.9
	中野	65.8	22.9	20.0	14.3	5.7	14.3	11.4
	吉田	60.1	30.1	16.5	1.7	6.7	5.0	1.7
	秋鹿	53.3	36.7	23.3	6.7	3.3	6.7	3.3
非農業	池田	67.6	37.8	8.1	5.4	8.1	13.5	5.4
	口羽	54.8	35.9	13.2	9.5	0	18.9	9.5
	持田	52.7	32.7	10.9	9.1	1.8	12.7	3.6
	中野	68.5	35.2	7.4	9.3	9.3	13.0	11.1
	吉田	62.3	41.0	19.7	6.6	0	6.6	11.5
	秋鹿	62.7	43.3	16.4	6.0	4.5	6.0	6.0

（1位と2位の回答を加算し，10%以上を記載している）

第14表　週日の余暇活動
―女子―（%）

		テレビ	新聞・雑誌	ごろねなどの休息	趣味活動	読書	だんらん	仕事をする
農業	池田	48.2	12.5	9.0	12.6	8.9	23.3	3.6
	口羽	56.4	27.3	20.0	5.5	12.7	25.5	0
	持田	62.6	36.1	18.1	8.3	2.8	9.7	2.8
	中野	59.0	26.2	6.6	11.5	8.2	23.0	8.2
	吉田	45.3	18.7	22.7	2.7	1.3	37.3	4.0
	秋鹿	52.1	38.4	8.2	1.4	4.1	31.5	4.1
非農業	池田	40.7	25.9	11.1	18.5	7.4	40.7	7.4
	口羽	71.1	26.3	5.3	13.2	5.3	39.5	7.9
	持田	43.6	17.9	5.1	12.8	5.1	33.3	0
	中野	53.7	22.0	0	9.8	14.6	29.3	7.3
	吉田	67.7	34.7	4.3	2.2	6.5	28.2	13.0
	秋鹿	47.7	36.3	4.5	11.4	11.4	27.2	20.4

（1位と2位の回答を加算し，10%以上を記載している）

第15表　余暇の要求と余暇の計画

(%)

	余暇がもっとほしい				余暇を利用してやってみたいものがある			
	男子		女子		男子		女子	
	農	非農	農	非農	農	非農	農	非農
池田	30.0	48.6	39.3	63.0	23.3	48.6	35.7	37.0
口羽	42.5	54.8	52.7	57.9	35.0	54.7	47.3	65.8
持田	38.9	54.5	41.7	56.2	18.5	34.5	26.4	46.2
中野	54.3	63.0	68.9	75.6	34.2	46.3	36.0	51.2
吉田	41.8	55.7	57.3	47.7	20.0	44.3	30.7	52.1
秋鹿	50.0	62.7	67.1	49.9	36.7	40.3	35.6	29.5

＜余暇の要求と余暇計画＞

余暇の要求度は，全体としてかなり高い比率を示している。それは農業従事者より非農業者に，男子より女子に切実である。また，これを地区間差についてみると，多少の不揃いはあるが，男女ともに中野，秋鹿の両地区が高率を示し，池田，持田の両地区は低率で，吉田，口羽の両地区がその中間に位置している。これを前出の余暇時間の量と関連させてみると，要求度の高い地区は，全般的に余暇時間が短い。さらに，余暇利用の計画性を余暇の要求との関連において考察したとき，活動の計画に具体化を進めているものの比率は低下する。具体的な内容を持っていると回答したものは，男子より女子が，農業従事者より非農業者が多く，地区間における差異はみられない。つまり，余暇の要求は持ちながら，その要求が何かの目的や計画と結びついたものでなく，漠然と要求しているものが余暇要求に回答したものの⅓を占めていることは問題である。

今後やってみたい余暇活動は，男女ともに小旅行が圧倒的に多く，次いで趣味活動や読書など，人間能力を高めるためのソーシャル・トレーニングが多い。これらの積極的余暇活動が生活の中に織りこまれるためには，やはり生活周期のパターンそのものが変革され，そこから休日や余暇が生み出され，新しい余暇の自発的集団形成が前提条件である。調査地の農村においては，なお余暇を余暇として利用する態度に欠けたものがあり，生活意識の停滞性が余暇利用にも反映している。

第16表　実施の程度と行なっていない理由　(%)

		(N)	余暇休日のスポーツ活動実施		スポーツ活動を行なっていない理由									
			行なったことがある	行なったことがない	見るのもきらい	運動は好きだが気にならない	仲間がいない	時間がない	場所がない	道具がない	お金がかかる	運動がへただから	病弱	指導者がいない
農業男子	池田	30	20.0	73.3	9.1	22.7	9.1	68.2		4.5	18.2			4.5
	志学	30	20.0	76.7	4.3	30.4		60.9	8.7					
	口羽	40	10.0	77.5		19.4	16.1	58.1	16.1	12.9			12.9	
	持田	54	11.1	72.2	7.7	23.1	7.7	64.1	12.8	7.7	2.6			10.3
	中野	35	8.6	85.8	3.3	13.3	10.0	86.6	13.3	3.3	3.3		3.3	
	吉田	60	18.3	70.0	4.8	33.3	2.4	64.3	16.7	7.1	4.8	9.5	2.4	4.8
	秋鹿	30	33.3	46.7		21.4		78.5	14.3	7.1		7.1		14.3
非農業男子	池田	37	32.4	56.8	4.8	42.9	4.8	52.4	9.5	4.8	9.5	4.8		
	志学	34	32.4	55.9		26.3	10.5	84.2		5.3			5.3	
	口羽	53	35.9	60.5	3.1	28.2	18.8	59.5	18.8			6.3	6.3	
	持田	55	29.1	61.8	5.9	32.9	8.8	55.9	14.7	11.8	2.9	2.9	2.9	
	中野	54	22.2	74.1	2.5	25.0	10.0	62.5	10.0	10.0	2.5	2.5	2.5	5.0
	吉田	61	32.8	57.4		42.9	14.3	51.4	8.6		2.9	8.6	2.9	5.7
	秋鹿	67	25.4	62.7	4.8	26.2	9.5	69.0	7.1	7.1	2.4	2.4	2.4	
農業女子	池田	56	5.5	80.4	2.2	26.6	13.3	51.0	17.7	4.4	2.2	4.4	4.4	6.6
	志学	53	18.9	73.6		17.9	17.9	69.2	17.9	7.7		10.3	5.1	7.7
	口羽	55	10.9	78.0		23.3	23.3	69.8	20.9	9.3	2.3	9.3	4.7	4.7
	持田	72	34.8	54.2	2.6	25.6	15.4	64.1	25.6	7.7		2.6	7.7	7.7
	中野	61	4.9	82.0		22.0	14.0	68.0	6.0	2.0	6.0	14.0	6.0	6.0
	吉田	75	22.7	68.0	5.9	19.6	11.8	52.9	23.5	5.9	2.0	3.9	7.8	3.9
	秋鹿	73	27.4	68.5		22.0	14.0	78.0	18.0	12.0	4.0	8.0		2.0
非農業女子	池田	27	33.3	63.0	5.9	11.8	29.4	41.2	11.8				5.9	5.9
	志学	25	24.0	72.0		33.8	5.6	38.9	11.1	11.1			5.6	11.1
	口羽	38	18.4	78.0		6.7	13.3	76.7	20.0	10.0		6.7	6.7	3.3
	持田	39	28.2	61.5	4.2	20.8	16.7	50.0	12.5	4.2	4.2	16.7	4.2	
	中野	41	14.6	70.8	3.5	10.4	10.4	79.4	6.9	10.4		3.5	6.9	13.8
	吉田	46	32.6	58.7		40.7	7.4	59.3	3.7		3.7	18.5	7.4	
	秋鹿	44	18.2	72.6		31.3	15.7	68.9	9.4	6.3	3.1	18.8		6.3

(重答による)

—参　考—　　スポーツの実施程度　　昭和44年3月

実施＼地区	大分県 直川村	秋田県 八竜町	岐阜県 土岐市	埼玉県 川口市	岐阜県 岐阜市	東京都 武蔵野市
率　(%)	28.2	33.2	71.4	62.7	60.1	57.1

(文部省体育局スポーツ課社会体育実態調査)

第17表　余暇休日のスポーツ実施程度と実施時間

―男　子―　(%)

		(N)	実施回数 ほとんど毎日	週に2～3回	週に1回	月に1～2回	1回の実施時間 20分以内	21～40分	41～60分	1～2時間	2～3時間	3時間以上
農業	池田	30	16.7			66.7	16.7	33.3		33.3		
	志学	30			33.3	33.3		16.7	16.7	33.3		
	口羽	40		25.0		75.0	25.0			50.0	25.0	
	持田	54		16.7	16.7	16.7	16.7	16.7		33.7		16.7
	中野	35				100.0	33.3		33.3	33.3		
	吉田	60			9.1	54.5	27.3	9.1		27.3	9.1	
	秋鹿	30	12.5	25.0		25.0	12.5	25.0	12.5	37.5		12.5
非農業	池田	37		8.3	16.7	66.7	25.0	33.3		16.7	16.7	8.3
	志学	34			27.3	63.6		36.4	27.3	36.4		
	口羽	53	5.3	15.8	31.6	47.4	21.1	36.8	15.8	21.1	5.3	
	持田	55	6.3	6.3	18.8	62.5	6.3	18.8	18.8	31.3	12.5	12.5
	中野	54	8.3	8.3		58.3	16.7	16.7		25.0	25.0	16.7
	吉田	61		15.0	5.0	50.0	10.0	30.0		25.0	35.0	
	秋鹿	67	5.6	16.7	5.6	61.1	22.2	22.2	5.6	27.8	11.1	11.1

(重答による)

第18表　余暇休日のスポーツ実施程度と実施時間

―女　子―　(%)

		(N)	実施回数 ほとんど毎日	週に2～3回	週に1回	月に1～2回	1回の実施時間 20分以内	21～40分	41～60分	1～2時間	2～3時間	3時間以上
農業	池田	56				100.0	66.7		33.3			
	志学	53			10.0	30.0	20.0			30.0		40.0
	口羽	55				33.3	16.7		16.7	33.3		
	持田	72			5.0	75.0	10.0	5.0		50.0	35.0	
	中野	61				66.7	66.7					
	吉田	75		5.9		11.8	11.8	11.8	11.8	11.8	29.4	
	秋鹿	73		5.6		11.1	16.7	22.2	5.6	33.3	22.2	
非農業	池田	27		11.1		66.7	11.1		11.1	66.7	11.1	
	志学	25		33.3		50.0	16.7	66.7				16.7
	口羽	38				85.7		85.7	14.3			
	持田	39	20.0		10.0	50.0	20.0	20.0	20.0	40.0		
	中野	41			16.7	33.3	33.3	16.7		50.0		
	吉田	46			6.7	20.0	20.0	13.3		20.0	20.0	20.0
	秋鹿	44		12.5	25.0	37.5		50.0	25.0	25.0		

(重答による)

第19表　スポーツの実施場所と実施種目

一男　子一　(%)

		(N)	運動仲間 いつもまっている大体き	運動仲間 きまっていない	運動場所 家(自宅)	運動場所 空地・広場・道路	運動場所 学校・公民館	運動場所 勤務先	運動種目 バレーボール	運動種目 野球	運動種目 卓球	運動種目 キャッチボール	運動種目 バドミントン	運動種目 ソフトボール	運動種目 庭球	運動種目 陸上運動	運動種目 体操	運動種目 スキー
農業	池田	30	50.0	33.3	66.7			33.3		50.0		66.7	16.7					
	志学	30	16.7	66.7		16.7	33.3	50.0	16.7		16.7	33.3						16.7
	口羽	40	50.0	50.0	25.0	75.0			14.3	14.3	14.3	14.3	14.3	14.3				
	持田	54	33.3	50.0	33.3	33.3	33.3	33.4	66.7	66.7	16.7							
	中野	35	66.7	33.3	66.7	66.6	33.3				33.3	33.3				33.3	33.3	
	吉田	60	27.3	63.6	27.3	27.3	36.4		63.6	27.3	18.2	18.2	9.1					
	秋鹿	30	50.0	50.0	23.1	7.7	46.2		60.0		20.0	10.0				40.0		
非農業	池田	37	41.7	50.0	33.3	16.7		16.7		16.7	16.7	41.7		8.3		16.7		16.7
	志学	34	90.9	9.1		18.2	36.4	45.5	18.2	36.3	18.2	18.2		9.2	9.2			18.2
	口羽	53	78.9	21.1	21.5	21.5	57.9	36.8	5.3	21.4	26.5	37.1	10.6	10.6	42.4			
	持田	55	62.5	37.5	6.3	25.0	37.5		68.8	50.0	18.8			6.3	12.5	6.3		
	中野	54	83.3	16.7	16.7	41.6	33.3	16.7		50.0	25.0	33.3	8.3	8.3	8.3	25.0		8.3
	吉田	61	75.0	25.0	5.0	10.0	65.0	20.0	25.0	55.0	5.0	20.0	25.0	5.0				
	秋鹿	67	66.7	33.3	4.5	23.7	31.8	31.8	41.2	29.4	11.8	29.4		5.9	11.8			

(運動場所 運動種目　重答)

一女　子一　(%)

		(N)	運動仲間 いつもまっている大体き	運動仲間 きまっていない	運動場所 家(自宅)	運動場所 空地・広場・道路	運動場所 学校・公民館	運動場所 勤務先	運動種目 バレーボール	運動種目 卓球	運動種目 バドミントン	運動種目 ソフトボール	運動種目 なわとび	運動種目 運動会	運動種目 スキー
農業	池田	56	66.7	33.3	66.7		33.3		100.0		33.3				
	志学	53	50.0	40.0	20.0		60.0	10.0	90.0	10.0					10.0
	口羽	55	50.0	33.3	50.0	16.7	50.0		83.3	16.7		16.7			
	持田	72	30.0	70.0	15.4	33.3	76.9		96.0						
	中野	61	33.3	66.7	33.3	33.3	66.7		33.3		33.3		33.3		
	吉田	75	52.9	41.2	5.9	23.5	70.6		94.1	17.6	11.8	5.9	5.9	5.9	
	秋鹿	73	72.2	27.8	22.7	9.1	63.6		70.0	20.0	10.0			10.0	
非農業	池田	27	66.7	22.2		11.1	55.6	22.2	66.7	11.1	11.1				
	志学	25	83.3	16.7	33.3	33.3		16.7	33.3	33.3					33.3
	口羽	38	57.1	42.9	42.9	57.1	28.6	28.6	100.0	28.6	14.3	14.3	14.3		
	持田	39	70.0	30.0	18.8	18.8	31.3	31.3	90.9	45.5			9.2		9.2
	中野	41	33.3	66.7	33.3	16.7	66.7	16.7	50.0	33.3	33.3			16.7	
	吉田	46	60.0	33.3	13.3	6.7	66.7		86.7	20.0	6.7	6.7			
	秋鹿	44	75.0	25.0	16.7	33.3	16.7	16.7	37.5	37.5			12.5		

(運動場所 運動種目　重答)

第20表　スポーツの実施場所と実施種目

第21表 収入の増加と将来計画

—男子—

(%)

		(N)	ヨンレクリエーシ	栄養(食物)	家の改善	農器具	子供の教育	自動車
農業	池田	30	16.7	3.3	46.6	16.7	56.7	13.3
	志学	30	26.7	10.0	56.7	43.3	23.3	13.3
	口羽	40	22.5	10.0	55.0	22.5	27.5	10.0
	持田	54	16.7	9.3	64.8	25.9	35.2	9.3
	中野	35	17.2	11.4	54.3	34.3	22.9	22.9
	吉田	60	23.4	8.4	70.1		45.1	5.0
	秋鹿	30	26.7	23.3	43.3	16.7	26.7	6.7
非農業	池田	37	51.3	8.1	37.8	10.8	37.8	8.1
	志学	34	35.3	8.8	64.7	8.8	32.4	14.7
	口羽	53	45.4	5.7	64.3	5.7	24.6	13.2
	持田	55	47.3	1.8	54.5	9.1	21.8	12.7
	中野	54	37.0	3.7	53.7	7.4	27.8	20.4
	吉田	61	39.3	9.8	50.8	3.3	44.3	6.6
	秋鹿	67	40.3	6.0	64.2	7.5	26.9	16.4

第22表 収入の増加と将来計画

—女子—

(%)

		(N)	ヨンレクリエーシ	栄養(食物)	家の改善	農器具	子供の教育	自動車
農業	池田	56	32.2	26.8	55.3	1.8	46.4	3.6
	志学	53	26.4	28.3	54.7	7.5	35.8	1.9
	口羽	55	34.5	14.5	67.3	1.8	31.0	5.4
	持田	72	26.4	13.9	62.6	2.8	33.4	2.8
	中野	61	21.3	19.7	45.9	3.3	44.3	9.8
	吉田	75	21.3	29.3	57.3	1.3	38.7	1.3
	秋鹿	73	28.8	34.2	56.1	2.7	30.1	2.7
非農業	池田	27	48.1	11.1	41.8	3.7	33.3	7.4
	志学	25	32.0	28.0	44.0		52.0	
	口羽	38	42.1	10.6	55.3		44.8	2.6
	持田	39	64.1	15.4	38.5		25.6	2.6
	中野	41	41.5	14.6	43.4		34.2	4.9
	吉田	46	32.6	21.7	34.7		43.4	
	秋鹿	44	43.1	6.8	52.2		27.2	2.3

2.　余暇におけるスポーツ活動の現状

(1)　実施の程度と実施を妨げる主な理由

①　調査期日を起点として，過去一年間のスポーツ活動実施の有無について，第16表，農業女子，池田地区，中野地区が5.5%，4.9%と低率を示しているのが注目される。比較的実施率が高いものでも，非農業男子，口羽地区35.9%で，児童の体位による，上位地区・下位地区の差，男女差についての目立つものがない。たゞ男子において，農業より非農業の実施率がやゝ高いことが認められる。

②　実施回数（第17，18表）については，継続して実施しているものは，男子において，農業の池田・秋鹿，非農業の口羽・持田・中野・秋鹿，女子では，非農業の持田と，全体からみても大変少なく，実施率も低い。各対象地区とも，農業・非農業，男女とも，月に1～2回実施しているものが多い。1回の実施時間については，男子農業が各地区とも1時間から2時間（約30.0%～50.0%）口羽地区の1時間から3時間（75.0%）は注目される。

女子においては，農業池田，中野の66.7%，非農業中野，吉田，秋鹿で40分以上が50.0%より高く，農業の持田，秋鹿以外との差が著るしい。

③　スポーツ活動を実施していない理由として

①　「時間がない」とするものが対象全地区の農業，非農業，男女，全体を通して39%から86.6%と高率を示している。（第16表）

②　「スポーツ活動は好きだけれども実施したくない」については，①「時間がない」を除いては多くの回答をしている。これは，活動者(保護者)に，生活とスポーツ活動の関係，活動者をとりまく環境条件が，スポーツ活動を実施するだけ十分整備されているかどうか問題にされねばならない。この調査は，余暇，休日におけるスポーツ活動と限定してあるにもかゝわらず「時間がない」とするものが，農業，非農業，男女の別なく共通していることは，今後検討を要する。

③　「場所がない」「金がかゝる」については，農業，非農業，男女の別なく，志学，口羽，池田を除いては，ある程度指摘されているが，全般的に，地域住民のスポーツ活動を支える基礎的条件としての施設，用具の未整備を問題にしてよい。

スポーツ活動の実施程度については―参考―，によっても，我国で低いレベルとして問題にされている大分県直川村（過疎化が激しい）28.2%，秋田県八竜町（純農村）33.2%と，中野，吉田，秋鹿の体位上位の各地区の実態と比較しても大差ない。このことは決して好ましい結果でなく，今後共その問題を明らかにしなければならない。

(2)　実施の場所と実施種目（第19，20表）

①　実施場所は，農業男女池田地区，農業男子中野地区の66.7%を筆頭に，自宅或は自宅近くの広場，空地，道路といった居住地域内での実践が多く，ついで学校，公民館の公共施設の利用が続いている。非農業に関しては，男女とも学校，公民館と勤務先の施設利用が農業男

女に比較するとやゝ多い傾向にある。

② 実施種目に関しては，女子において，バレーボールが高率を示し，続いて卓球，バドミントンとなっている。又，農業女子では，吉田地区を除いてバレーボールに集中している。非農業女子は，バレーボールのほかに，卓球，バドミントン，なわとび，スキーと多様化の傾向が微弱ではあるが推察される。女子のバレーボールは，全県的なレベルで，母親の市町村対抗が実施されていることも少なからず影響しているといえよう。

男子については，持田地区の農業，非農業ともバレーボールが高率であるが，他は，野球，卓球，野球のキャッチボールなど，女子に比較してやや多種目にわたっている。又，農業に比較して，非農業が，バドミントン，ソフトボール，庭球，スキーなど巾広い種目の実施状況を示している。

(3) 収入の増加にともなう将来計画

（第21，22表）農業，非農業，男女，体位上位地区体位下位地区の観点からは；

①家の改善　②子供の教育，といずれも比較的高率を示し，上記の性別，職業による大きな差は見られない。

③レクリエーションについては，農業16.7～26.7%，非農業志学（35.3%）池田（51.3%）と高率である。全般に，農業と非農業の間に，僅かではあるが差がみられる。男女とも非農業の方が，やゝ関心が高い傾向にある。

児童の成長発達に関して，児童をとりまく生活環境が大きく影響することは，こゝで述べるまでもなく，各種の研究領域の研究報告でも明らかにされている。特に成長期にある児童の発育・発達に関して，体育・スポーツ活動が大きな役割をはたしていることも一般に認識されている。こゝでは，児童のスポーツ活動に，いろいろな面で影響を及ぼしている要因の一つとして，保護者のスポーツ活動に視点をあわせ，各地区児童の，今後の成長発達の条件整備の一指針を明らかにしようとするものである。

前述の(1)，(2)，(3)，で指摘したように対象地区全般の保護者のスポーツ活動は活発に行なわれているとはいえない。余暇，休日のスポーツ実践と限定したにもかゝわらず，実施率は全般に低い。加えて，実施困難の理由として，①「時間がない」ということは，前項の余暇利用の結果から理解できるように，テレビ・新聞・雑誌，家族との団楽，と休息型，乃至慰安型であることから理解できる。

従来，他の各調査で明らかにされている典型的農村型（純粋な休息でなく，本業以外の仕事をする）で，非農業者において，僅かに能動的な余暇利用の傾向がみられるにすぎない。又，学校などの公共施設の利用度が高く，各対象地区の施設利用状況から，施設の整備状況，文化的活動の中心をそこに依存していることも推察できる。運動仲間についても，大低決まった相手と活動しているが，実施時間の集中傾向などから，スポーツ活動を直接の目的として実践してきたものか，或は，他の目的のために集まりながら，従属的にスポーツ活動を実践してき

たものか，その組織の有無，類型，など今後の資料の整理により，明らかにしなければならない。

3．地区保健の実態

次に，地区における保健問題について，主として公衆衛生の実践的局面から地区住民の実態をとらえ，その活動基盤を考察する。まづ，保健的認識の水準と課題を把握するために，調査の項目，内容を主に地区レベルでの保健福祉事業に対する住民の対応を予想して（意識，思想，判断，態度，行動など）総合的見地から実践に即して構成してみた。第23表以下第27表まではそれによる調査結果である。

(1) 「ツベルクリン反応検査の結果の認識」は，自己の身体認識の指標としての意義を予想した。

総じて男子農業者群の成績不良が著るしく，非農業者群との差が大きい。女子群においても同様に，農業者群の成績が非農業者群を下廻る傾向にあるが，両群ともに男子に比べて優位である。地区別にみると，口羽ならびに中野地区が男女とも認識度が高い。因みに，口羽地区の属する羽須美村は，高度な計画と実践組織をもった保健福祉活動の永年の実績を背景としていることから，これはひとつの地区住民保健に関する社会的効果として理解したい。

ツベルクリン反応検査結果の「認識の不明確」とは，「わすれた」，及び「無回答」の総計である。

(2) 結核検診については，一部の地区（持田）を除いて，全般に女子群の方に「その都度必ずうけるべきだ」という自覚度が高い。この項も前項におけると同様，非農業者群が優れる傾向を示している。とくに，口羽，秋鹿，中野の三地区が全体に，「原則的に正しい認識」を示す度合いが高いといえる。吉田地区はこれに次ぎ，他は下位に属する。

前述したように，全般に女子群の優位傾向は共通しているが，口羽地区の女子農業者群の成績が他のどれよりも優る点が注目される。

(3) 次に，その実践的側面から，「受診に対する態度」についてとりあげた。表示する積極型とは，「すすんでうける」とするものであり，消極型は，「ほとんどうけない」ものを示している。ここにおいても性差が著明で，全体を通して女子群の「積極性」が優位にあらわれている。農業及び非農業者群別では，口羽地区の女子農業者群と中野地区の男女農業者を除いて，他は非農業者群がまさっている。地区別に，口羽，中野，吉田の三地区の受診態度・実績がとくに顕著であり，持田及び秋鹿地区がこれに次いでいる。

「ほとんどうけない」とする消極型は，池田，志学，持田，秋鹿地区の一部にみられるように，結果的に市部近隣の地区内に認められた。

(4) 「寄生虫症防止」とは，具体的に種々の意味・内容を含んでいる。ひとつは手洗および清潔習慣であり，他は飲食物の衛生的管理と処理を予想した。しかし他面，特定の地区の風土的条件に係わる問題――例へば，鮎の生食，調理方法による罹患の危険――に対する態度など，

寄生虫症と直接的に関連する場合もある。これらの趣旨は設問内容に含められた。結果的に，性差が大きく認められ，特に女性の飲食物を直接扱う日常の役割的意義の反映とみることができる。全般的に非農業者群にいく分の優位傾向がうかがえた。

(5)　「成人病予防」については，「定期的にやるのがよい」を積極的支持型としたが，総じて女子の関心が高いといえる。地区別に観察すると，口羽地区の場合，男女両群（農，非農）ともに80%以上の支持率を示し，他地区との差が大きかった。全体的に，吉田，中野の両地区及び秋鹿地区がこれに次いでいる。農業・非農業者群の差は，一部を除いて必ずしも顕著であるとはいえないが，男子農業者群に稍々消極傾向が観察される。

(6)　前項と同様，「伝染病予防接種」に対して，「その都度するべきである」及び「いつもすすんでうける」とする「積極型」においても，総じて女子群が優っている。地区別では，口羽地区を筆頭に，中野，吉田地区が優れ，とくに女子群では口羽，中野の両地区の優位性が目立っている。すなわち，思想と実践的態度傾向との落差が僅少で，意識と行動の相対的一致度が高いとみることができる。他地区はこれらの乖離，矛盾傾向がかなり著るしい。表示した指数は，積極的意見に対する，意見（思想）と実践的態度の差の割合を以って表わした。

(7)　次は，保健的関心や知識の充足をマスメディアを中心とする情報接受の拡がりにおいて求めたものである。全体的に男女とも非農業者群に「大いに関心がある」とするものが多い。また性差が著るしく，女性の関心がたかいことが知られる。何れの地区においても，保健知識の情報源（第24表）は，テレビジョン，ラジオ，新聞，雑誌のマスメディアに代表されるが，地区レベルでの保健活動が積極的に推進されたり，歴史的にその実績が豊かであるとみられる地区では，一活動の計画・組織や推進母体の性格のちがいによって多少の差はあるにしても一医師，役所，公民館，保健所，婦人会などをあげる割合いが他地区に比して高いことが認められる。

また，男子非農業者群の観察から，保健情報の通路として，職場の果す役割が重要であることが暗示される。

(8)　地区健康化のための重点施策（第25表）については，主に「成人病対策」，「蚊やはえの駆除」に対する必要が強く示されている。この事実は，地区活動の実績が地区に浸透して，意識の背景や素地をなしているためと考えられる。

そのほか，「栄養・育児指導」，「からだづくり」，「環境衛生」などに積極的関心の萌芽がみられ，従来の単なる疾病予防の観点から更に健康増進のための条件整備へと関心，態度の方向の変化が覗える。「からだづくり」については，男女とも概して非農業者群に関心がもたれていることが知られる。

(9)　地区住民の健康を推進させるための中心的役割を期待される集団は，第26表にみられる通り，婦人会，部落会，農協婦人部の三者に代表され，婦人の期待される役割の高さをあらわしている。

内容的に，傾向として男子群は部落会を，女子群は婦人会を支持しており，活動の責任次元を男女それぞれ自分の側に置いていることが注目される。このことは，既成の組織基盤や集団に対する期待値が大きいことを意味すると同時に，その実践活動への主体的参加の可能性を示唆するものであるといえよう。

(10)　次に，生活適応の問題を主に保健的側面から，第27表の項目に沿って捉えてみた。その意味するところは，この調査結果の限りにおいて明らかではないが，基本的には種々の生活条件――とくに生活時間構造，労働の性質など――に関連することとおもわれる。生活の現状に対する満足及び不満足は，判断の規準や要求水準とのかかわりにおいて，その実質・内容を異にするであろうが，ここでは傾向として不満を示すものが男女とも農業者群にいく分たかくあらわれている。

第23表　地区保健福祉事業に対する住民の対応(%)

		(N)	結核検診に対する意見 積極型	結核検診の受診 積極型	結核検診をほとんどうけないもの 消極型	寄生虫症防止のための 積極型	成人病検診に対する意見 積極型	伝染病予防接種に対する意見 積極型	予防接種実施における実績 積極型	予防接種実施における思想と行動のズレ	保健情報(マスコミ)に対する関心 積極型
農業男子	池田	30	43.3	33.3	40.0	26.7	46.7	46.7	46.7	13.3	71.5	33.3
	志学	30	33.3	36.7	43.3	16.7	26.7	73.3	56.7	33.3	41.3	23.3
	口羽	40	22.5	67.5	75.0	5.0	47.5	80.0	72.5	62.5	13.8	22.5
	持田	54	40.7	50.0	55.6	11.1	38.9	61.1	53.7	24.1	55.1	20.4
	中野	35	20.1	77.2	77.2	5.7	40.0	60.1	68.6	51.5	24.9	25.7
	吉田	60	41.7	56.8	70.1	6.7	28.4	65.1	73.3	58.3	19.1	13.3
	秋鹿	30	33.4	66.7	56.7	13.3	43.3	70.0	76.7	50.0	34.8	33.3
非農業男子	池田	37	18.9	51.4	59.5	16.2	48.6	73.0	70.3	35.1	50.1	56.8
	志学	34	29.4	41.2	52.9	23.5	52.9	64.7	61.8	26.5	57.1	41.2
	口羽	53	5.7	73.7	79.4	3.8	56.7	85.1	86.9	77.5	9.7	37.8
	持田	55	29.1	60.0	61.8	10.9	43.6	67.3	69.1	36.4	47.3	23.6
	中野	54	14.8	66.7	70.4	7.4	46.3	79.4	74.1	53.7	27.5	27.8
	吉田	61	31.2	70.5	77.0	0	31.1	83.6	70.5	47.5	32.6	31.1
	秋鹿	67	28.3	62.7	67.2	4.5	38.9	65.7	62.7	40.3	35.7	28.4
農業女子	池田	56	32.1	42.9	50.0	25.0	69.6	73.2	71.4	28.6	59.9	35.7
	志学	53	26.5	54.7	60.4	9.4	73.6	69.8	75.5	32.1	57.5	41.5
	口羽	55	10.9	85.5	92.7	0	72.7	89.1	83.6	78.2	6.5	43.6
	持田	72	30.6	48.7	57.0	13.9	70.9	75.0	58.2	33.3	42.8	27.8
	中野	61	6.6	78.7	90.2	0	73.8	83.6	86.9	78.9	9.4	41.0
	吉田	75	32.0	64.0	80.0	1.3	65.3	73.3	66.7	57.3	14.1	30.7
	秋鹿	73	19.2	68.5	72.6	5.5	64.4	83.6	74.0	49.3	33.4	32.9
非農業女子	池田	27	11.1	55.5	77.8	7.4	74.1	77.8	70.4	40.7	42.2	48.1
	志学	25	24.0	52.0	68.0	16.0	76.0	80.0	76.0	56.0	26.3	48.0
	口羽	38	0	78.9	89.5	2.6	76.3	89.5	92.1	71.1	22.8	47.4
	持田	39	15.4	59.0	76.9	7.7	82.1	76.9	79.5	51.3	35.5	30.8
	中野	41	7.3	73.2	87.8	0	73.2	80.5	87.8	80.5	8.3	51.2
	吉田	46	26.0	67.3	89.0	0	80.3	89.0	80.3	58.6	27.0	41.2
	秋鹿	44	22.7	63.6	74.9	4.5	70.4	77.2	81.7	65.8	19.5	40.9

3.(6)　参照

第24表　保健知識の情報源（%）

		テレビジョン	新聞・雑誌	医師	役所・公民館	保健所	婦人会	職場	家族
農業男子	池田	36.7	36.7	20.0	16.7	10.0	—	13.4	10.0
	志学	56.7	40.0	13.3	10.0	13.0	—	0	3.3
	口羽	47.5	32.5	15.0	27.5	20.0	—	5.0	7.5
	持田	37.0	38.9	16.7	31.5	7.4	—	1.9	11.1
	中野	54.3	28.6	8.6	40.0	11.4	—	2.9	17.2
	吉田	45.0	33.3	28.3	16.7	21.7	—	0	0
	秋鹿	43.3	66.7	13.3	26.7	6.7	—	0	3.3
非農業男子	池田	48.6	48.6	18.5	27.0	10.8	—	2.7	2.7
	志学	47.1	47.1	14.7	5.9	8.8	—	11.8	2.9
	口羽	52.9	49.1	15.1	30.2	1.9	(農協) 24.6	24.6	1.9
	持田	38.2	52.7	18.2	10.9	0	—	29.1	1.8
	中野	40.7	50.0	13.0	16.7	14.8	—	11.1	7.4
	吉田	47.5	47.5	14.8	9.8	4.9	—	23.0	6.6
	秋鹿	37.3	43.3	11.9	14.9	4.5	—	29.9	7.5
農業女子	池田	50.0	35.8	28.6	7.2	14.4	16.1	0	5.4
	志学	58.5	22.6	13.2	13.2	22.6	26.4	0	1.9
	口羽	38.2	21.8	18.2	38.2	23.6	10.9	0	3.6
	持田	38.9	36.1	9.7	33.4	8.3	25.0	0	7.0
	中野	39.3	31.1	9.8	18.0	18.0	29.5	0	3.3
	吉田	50.7	22.7	18.7	17.3	18.7	24.0	0	4.0
	秋鹿	30.1	49.3	6.8	30.1	8.2	31.5	1.4	2.7
非農業女子	池田	62.9	40.7	3.7	11.1	14.8	11.1	11.1	11.1
	志学	52.0	48.0	12.0	8.0	28.0	8.0	8.0	8.0
	口羽	55.3	55.3	18.4	13.2	2.6	15.8	10.5	5.3
	持田	56.4	43.6	15.4	12.8	0	7.7	15.4	0
	中野	29.3	36.6	9.8	12.5	22.0	22.0	24.4	4.9
	吉田	67.3	52.1	10.9	4.3	8.7	13.0	8.7	2.2
	秋鹿	38.6	59.0	11.4	6.8	9.1	13.6	15.9	0

（1位と2位の回答を加算している）

第25表　地区の健康化のための重点施策(%)

		(N)	寄生虫症予防対策	蚊やはえの駆除	環境の衛生化	成人病予防対策	栄養・育児指導	からだづくり
農業男子	池田	30	6.6	56.6	16.7	30.0	10.0	10.0
	志学	30	3.3	43.3	10.0	40.0	16.7	20.0
	口羽	40	22.5	30.0	10.0	52.5	12.5	7.5
	持田	54	14.8	40.7	22.2	33.3	14.8	9.3
	中野	35	14.3	42.9	17.2	37.2	17.2	14.3
	吉田	60	10.0	51.7	5.0	51.7	18.3	18.3
	秋鹿	30	6.7	36.7	16.7	43.3	20.0	23.3
非農業男子	池田	37	13.5	43.2	27.0	37.8	16.2	16.2
	志学	34	2.9	47.1	5.9	35.3	17.6	23.5
	口羽	53	9.5	39.7	13.2	58.6	13.2	24.6
	持田	55	9.1	47.3	16.4	38.2	18.2	14.5
	中野	54	5.6	38.9	13.0	42.6	18.5	18.5
	吉田	61	9.8	41.0	6.6	49.2	27.9	18.0
	秋鹿	67	14.9	40.3	17.9	46.3	7.5	16.4
農業女子	池田	56	10.7	53.5	14.4	35.7	23.2	12.6
	志学	53	9.4	45.3	3.8	49.1	35.8	17.0
	口羽	55	18.2	32.7	12.7	60.0	20.0	9.1
	持田	72	11.1	54.2	15.3	37.5	15.3	12.5
	中野	61	16.4	55.7	8.2	37.7	24.6	13.1
	吉田	75	12.0	45.3	2.7	33.3	18.7	14.7
	秋鹿	73	19.2	37.0	15.1	31.5	26.0	21.9
非農業女子	池田	27	18.5	48.1	3.7	33.3	44.4	22.2
	志学	25	8.0	56.0	8.0	28.0	36.0	16.0
	口羽	38	18.4	44.7	13.2	31.6	26.3	31.6
	持田	39	7.7	48.7	15.4	20.5	28.2	15.4
	中野	41	17.1	39.0	19.5	31.7	19.5	9.8
	吉田	46	13.0	39.1	19.5	47.7	26.0	15.2
	秋鹿	44	20.4	47.7	15.9	25.0	27.2	15.9

(1位と2位の回答を加算している)

第26表　地区保健活動に期待される団体(%)

		婦人会	農協婦人部	部落会
農業男子	池田	40.0	36.6	56.7
	志学	53.3	13.3	60.0
	口羽	40.0	25.0	57.5
	持田	33.3	11.1	72.2
	中野	60.1	37.2	57.2
	吉田	56.7	8.3	53.3
	秋鹿	50.0	30.0	66.7
非農業男子	池田	48.6	18.9	64.8
	志学	52.9	14.7	55.9
	口羽	68.0	5.7	75.6
	持田	38.2	9.1	70.9
	中野	61.1	27.8	50.0
	吉田	62.3	4.9	63.9
	秋鹿	49.3	4.5	67.2
農業女子	池田	51.8	42.8	55.3
	志学	73.6	20.8	45.3
	口羽	60.0	40.0	52.7
	持田	66.7	25.0	61.2
	中野	72.1	44.3	45.9
	吉田	72.0	12.0	50.7
	秋鹿	61.6	28.8	61.6
非農業女子	池田	62.9	25.9	66.6
	志学	64.0	16.0	56.0
	口羽	49.1	18.2	40.0
	持田	69.2	10.3	61.5
	中野	83.0	19.5	36.6
	吉田	76.0	4.3	69.4
	秋鹿	49.9	15.9	54.5

(1位と2位の回答を加算している)

第27表　生活適応(%)

		すぐれない(自分の健康)	疲れをもちこす	睡眠が不足がち	今の生活に全般的にいって不満
農業男子	池田	6.7	16.7	30.0	10.0
	志学	13.3	20.0	33.3	6.7
	口羽	12.5	15.0	32.5	12.5
	持田	3.7	11.1	16.7	9.3
	中野	8.6	22.9	42.9	5.7
	吉田	10.0	21.7	35.0	10.0
	秋鹿	10.0	10.0	20.0	10.0
非農業男子	池田	10.8	21.6	37.8	2.7
	志学	14.7	23.5	47.0	8.8
	口羽	11.3	11.3	37.8	3.8
	持田	7.3	10.9	30.9	3.6
	中野	18.5	13.0	29.6	0
	吉田	1.6	16.4	16.4	3.3
	秋鹿	6.0	14.9	41.8	4.5
農業女子	池田	12.5	23.2	40.1	7.1
	志学	7.5	13.2	37.7	9.4
	口羽	16.4	18.2	47.3	9.1
	持田	9.7	13.9	32.0	7.0
	中野	16.4	24.6	44.2	6.6
	吉田	4.0	20.0	49.4	12.0
	秋鹿	2.7	4.1	43.8	8.2
非農業女子	池田	14.8	11.1	40.7	0
	志学	24.0	24.0	60.0	16.0
	口羽	11.8	17.2	45.2	2.6
	持田	12.8	20.5	46.1	7.7
	中野	12.2	17.1	48.8	9.8
	吉田	2.2	19.5	39.1	4.3
	秋鹿	13.6	13.6	54.5	4.5

4.　学童の身体発達に対する保護者の認識

(1)　認識の実態

このことについては，従来の調査では地区の子どもの評価基準は厳しいが，「わが子」に対しては評価基準を低める傾向があることが指摘された。すなわち，「わが子」の低体位に気づかず，もっぱら他人の事柄として学童の低体位を捉えており，この意識を変容することが，これ

まで二・三の地区から提起された「体位向上運動」※註推進のために不可欠な基本的観点として強調された。今回の調査対象地区では第28表のような結果がでた。

近年における学童の身体的発達の加速化および成熟の前傾々向について，「よく知っていた」とするものは，農業・非農業者群で比較すると非農業者群に高く，性差別では女子に高い。

学童の体位の比較的すぐれている地区と劣っている地区とでは，低体位地区の方が比較的高く，子どもの発育に対する関心の高さを示している。しかし，男子農業者群の持田・吉田地区の如く40%台を割る地区もあり，地区間差のあることを示している。又，身体的発達の加速化および成熟の前傾々向を「知らなかった」とするものが農業者群に少数ではあるが存在した。

次に，「地区の子ども」の発育状態については，男子では「よい」と思っているものが比較的低体位地区に多く，女子では逆に体位の優位地区に多かった。又，性差に関係なく「劣る」と思っているものが多い地区は，持田・秋鹿等の松江市近郊地区で，都市部の学童との接触の機会が多いため，比較的客観的な見地から評価しているものと思われる。自分の地区は「よい」と判断しているところでも，例えば口羽男子のように，比較対象として同村のさらに悪い地区をあげ，そこよりも「よい」としているところもある。

ところが，ひとたび「わが子」の発育状況となると，多くの地区で性差，農業・非農業者群に関係なく，「よい」と答えたものが「劣る」と答えたものを上まわっている。その傾向は女子よりも男子に著明である。又，「普通」だと考えているものが半数以上いるが，日本の子どもの発育加速現象を多くのものが認知しながらこれらの結果がでたことは，いまだ自他の「からだ」について科学的評価ならびに認識が不確実であって，その事実認識において多くの矛盾傾向を露呈しやすいことを示しているといえよう。

「子どもの発育のために重要と思われる事項」(自由記述) については第29表のように，職業・性別・体位の優劣地区に関係なく，いずれも「栄養」を第1位にあげており，次いで「運動」，「睡眠」，「環境」，「健康」の順にあげている。このことは，子どもの発育にとって欠くことの出来ない要素を一応一般的知識として認識していることを示している。しかし，身近かな「この地区の子どもの発育のために何が必要か」という質問には，やはり第1位に「栄養」をあげ，第2位に「運動」をあげているが，その比率は第29表の如く少なくなり，上記の一般的知識として認知していることでも不確実になる傾向がある。第3位には施設の問題として「遊び場所」があげられていた。

(2)　学童の生活管理に関する保護者の認識

子どもの管理的側面についてみると，いずれの地区でもほとんどの項目で母親の関心が高く「子どもの世話は母親がするものだ」という意識が強く現われている。

個々の項目をみると，第30表の如く，「子どもの健康・発育について」は農業・非農業者群

※註　学童の低体位施策に関する地区診断的研究　福井一明・喜多村　望
島根大学教育学部紀要第4巻（教育科学）　昭45年

による差が多少現われており，農業者群に一般的に低く，女子非農業者群に「いつも気をくばる」としているのが最も高い。又，「あまり留意しない」と答えたものが男子に多く，無記のものを加えるとかなりの数にのぼり，関心の低いことがわかる。特に持田の男子農業者群の如く6人に1人の割合で「あまり留意しない」としているのが顕著である。

「安全についての配慮」では，近年の交通事故の増加に伴って，「安全」といえば直ちに交通安全を想起するが，これらの地区においても例外ではなく，通学路に幹線道路が通っている地区では関心が高い。

「子どもの躾や教育」面における家庭の主体性と学校への依存度をみると，志学・持田・中野・秋鹿で幾分学校への依存度が高くなっているが，総体的には女子よりも男子に，非農業者群よりは農業者群に学校への依存度が高い。

「子どもの世話」については，「十分みてやれない」とするものが農業者群に多く見られ，「ほとんどみてやれない」とするものは男子非農業者群にみられる。反面，「よくみてやれる」としているのも非農業者群の方が多い。

「子どもの健康診断の結果」については，ごく少数ではあるが女子においては低体位地区の方が関心が高い。しかし，「知ることもある」や「たいてい知らない」とするものを合わせるとかなりの数にのぼる。

「自分の子どもの健康度」については，大いに満足している人が男子9.0%，女子8.3%と意外と少なく，「弱い」と判断している人が男子10.9%，女子15.9%と，特に女子に多い。

「子どもの健康上の心配事」では，病的なものより体力・体位・偏食といったものをあげる人が多く，子どものからだの中でも形態的なものへの関心が特に高いことがわかる。

Ⅳ　要　　約

それぞれの地区における調査成績から，検討領域別に次のことが要約された。

1. 全体として生活の時間的なゆとりに乏しく，それは農業従事者に特記される。
2. 余暇利用の特徴は，マスコミ・休息型であるが，定期的な休日をもたないものが多いことと関連して，休日の余暇利用も平日とほぼ類似の傾向を示し，余暇利用として仕事をするものがふえる。
3. スポーツ活動実施の状況は，各対象地区，農業・非農業，男女いづれに関しても消極的で，満足すべき状態ではない。
4. 自主的，継続的な活動はみられず，外から提供されたスポーツ・プログラム (program service) に誘引された活動形態が比較的に多いとおもわれる。
5. 余暇利用の傾向が，農村特有の休息型で，スポーツ活動など能動的に取り組む姿勢が稀薄である。
6. 保健認識全般については男女による性差が大きく，女子の成績がよい。

第28表　学童の身体発達に対する保護者の認識　(%)

		(N)	日本の子供の体位			地区の子供の体位				自分の子供の体位		
			よく知っている	少しは知っている	知らなかった	よい	普通	劣る	大変劣る	よい	普通	劣る
農業男子	池田	30	46.7	26.7	0	16.7	63.3	3.3	0	23.3	53.3	6.7
	志学	30	63.3	23.3	3.3	16.7	36.7	30.0	0	26.7	53.3	13.3
	口羽	40	60.0	27.5	5.0	20.0	45.0	20.0	0	20.0	65.0	10.0
	持田	54	38.9	38.9	3.7	11.1	55.6	14.8	1.9	16.7	64.8	5.6
	中野	35	51.5	37.2	2.9	14.3	68.6	2.9	0	17.2	51.5	25.7
	吉田	60	38.3	36.7	8.3	5.0	68.3	10.0	0	3.3	68.3	13.3
	秋鹿	30	53.3	23.3	3.3	3.3	46.7	40.0	0	16.7	60.0	16.7
非農業男子	池田	37	73.0	16.2	2.7	21.6	62.2	10.8	0	29.7	48.6	13.5
	志学	34	79.4	0	0	5.9	52.9	26.5	0	20.6	52.9	11.8
	口羽	53	83.2	11.3	0	22.7	56.7	17.0	0	22.7	64.3	13.2
	持田	55	58.2	20.0	1.8	10.9	43.6	30.9	0	10.9	60.0	14.5
	中野	54	74.1	11.1	1.9	24.1	53.7	5.4	0	29.6	44.4	14.8
	吉田	61	65.6	21.3	1.6	1.6	62.3	21.3	1.6	18.0	57.4	14.8
	秋鹿	67	53.7	20.9	1.5	4.5	35.8	40.3	0	10.4	59.7	11.9
農業女子	池田	56	67.9	23.2	1.8	14.3	71.3	5.4	0	28.6	62.5	7.1
	志学	53	62.3	20.8	3.8	9.4	49.1	30.2	1.9	17.0	54.7	20.8
	口羽	55	63.6	30.9	1.8	5.5	69.1	21.8	0	16.4	52.7	29.1
	持田	72	48.7	23.6	4.2	7.0	40.3	36.1	2.8	16.2	52.8	16.2
	中野	61	57.4	26.2	0	18.0	65.6	4.9	0	16.4	59.0	19.7
	吉田	75	42.7	40.0	5.3	10.7	60.0	17.3	0	13.3	61.3	13.3
	秋鹿	73	56.1	30.1	1.4	1.4	42.5	41.1	5.5	9.6	58.9	23.3
非農業女子	池田	27	74.1	14.8	0	22.2	59.3	7.4	0	25.9	51.9	18.5
	志学	25	84.0	8.0	4.0	4.0	60.0	32.0	0	12.0	64.0	20.0
	口羽	38	89.5	10.5	0	10.5	63.2	26.3	0	21.1	63.2	13.2
	持田	39	61.5	25.6	2.6	5.1	28.2	56.4	2.6	10.3	56.4	23.1
	中野	41	78.1	12.2	0	22.0	61.0	7.3	0	26.8	56.1	9.8
	吉田	46	73.8	17.4	0	10.9	58.6	26.0	0	17.4	62.9	15.2
	秋鹿	44	56.8	27.2	2.3	6.8	43.1	38.6	0	15.9	65.8	9.1

第29表　学童の発育条件についての意見・考え　(%)

		(N)	子供の発育にとって大切な条件（意見・考え） 栄養	運動	睡眠	環境	健康	この地区の子供の発育に特に必要な条件 栄養	運動	睡眠	遊び場 環境
農業男子	池田	30	33.3	16.7	0	3.3	0	10.0	6.7	0	0
	志学	30	60.0	40.0	0	10.0	16.7	16.7	16.7	0	10.0
	口羽	40	35.0	35.0	10.0	2.5	2.5	22.5	15.0	7.5	2.5
	持田	54	24.1	24.1	5.6	1.9	3.7	9.3	14.8	5.6	3.7
	中野	35	37.1	20.0	5.7	0	11.4	11.4	8.6	0	5.7
	吉田	60	36.7	25.0	8.3	0	5.0	18.3	11.7	1.7	0
	秋鹿	30	40.0	33.3	10.0	6.7	3.3	23.3	16.7	3.3	10.0
非農業男子	池田	37	41.9	40.5	0	8.1	0	8.1	18.9	0	24.3
	志学	34	52.9	35.3	14.7	8.8	2.9	11.8	23.5	0	17.6
	口羽	53	50.9	37.7	18.9	15.1	1.9	28.3	9.4	1.9	17.0
	持田	55	36.4	40.0	5.5	5.5	9.1	20.0	20.0	5.5	10.9
	中野	54	42.6	29.6	11.1	13.0	3.7	16.7	14.8	3.7	5.6
	吉田	61	49.8	36.1	3.3	0	3.3	18.0	9.8	0	8.2
	秋鹿	67	34.3	26.9	4.5	9.0	7.5	19.4	22.4	3.0	7.5
農業女子	池田	56	48.2	35.7	0	7.1	5.4	12.5	7.1	0	5.4
	志学	53	52.8	43.4	3.8	5.7	15.1	20.8	18.9	0	3.8
	口羽	55	38.2	32.7	5.5	5.5	14.5	18.2	9.1	0	9.1
	持田	72	45.9	30.6	5.6	11.1	8.3	15.3	18.1	1.4	13.9
	中野	61	49.2	42.6	8.2	6.6	13.1	16.4	13.1	4.9	3.3
	吉田	75	46.7	34.7	4.0	0	5.3	17.3	16.0	0	5.3
	秋鹿	73	57.5	31.5	8.2	15.1	15.1	24.7	19.2	4.1	5.5
非農業女子	池田	27	66.7	40.7	0	14.8	14.8	14.8	29.6	0	11.1
	志学	25	52.0	40.0	16.0	16.0	8.0	28.0	12.0	4.0	12.0
	口羽	38	68.4	50.0	23.7	15.8	2.6	26.3	18.4	0	23.7
	持田	39	51.3	46.2	12.8	7.7	5.1	15.4	17.9	0	15.4
	中野	41	61.0	31.7	12.2	14.6	7.3	7.3	9.8	4.9	4.9
	吉田	46	50.0	30.4	2.2	0	3	26.1	15.2	0	13.0
	秋鹿	44	56.8	34.1	4.5	13.6	11.4	18.2	6.8	0	9.1

第30表　学童の生活管理に関する保護者の認識　(%)

		(N)	子供の健康発育への配慮			子供の躾や教育		子供の世話			健康診断の結果		
			いつも気をくばる	ときたま気をくばる	あまり留意しない	十分心がけている	学校まかせ	よくみてやれる	十分みてやれない	ほとんどみてやれない	知っている	知ることもある	たいていらない知
農業男子	池田	30	40.0	23.3	3.3	40.0	36.7	20.0	50.0	3.3	50.0	23.3	6.7
	志学	30	53.3	30.0	10.0	36.7	50.0	16.7	70.0	6.7	40.0	33.3	16.7
	口羽	40	45.0	27.5	5.0	42.0	37.5	20.0	62.5	5.0	62.5	17.5	5.0
	持田	54	22.2	38.9	16.7	38.9	44.4	14.8	55.6	7.4	53.7	20.4	14.8
	中野	35	51.5	25.7	5.7	34.3	57.2	2.9	80.1	8.6	42.9	40.0	5.7
	吉田	60	43.3	35.0	3.3	41.7	40.0	8.3	75.0	0	51.7	25.0	6.7
	秋鹿	30	56.7	20.0	3.3	33.3	53.3	16.7	66.7	3.3	56.7	23.3	10.0
非農業男子	池田	37	56.8	18.9	8.1	48.6	37.8	27.0	54.1	10.8	45.5	29.7	10.8
	志学	34	52.9	20.6	5.9	44.1	35.8	17.6	52.9	11.8	58.8	26.5	0
	口羽	53	47.3	34.0	5.7	51.0	45.4	11.3	77.5	7.6	60.5	30.2	7.6
	持田	55	52.7	20.0	1.8	41.8	36.4	21.8	47.3	9.1	49.1	21.8	7.3
	中野	54	44.4	22.2	9.3	46.3	37.0	16.7	63.0	1.9	48.1	29.6	5.4
	吉田	61	47.5	36.1	3.3	47.5	32.8	18.0	60.7	6.6	59.0	23.0	4.9
	秋鹿	67	40.3	29.9	9.0	38.9	40.3	9.0	59.7	13.4	50.7	23.9	6.0
農業女子	池田	56	53.6	25.0	5.4	46.4	41.1	17.9	75.0	0	62.5	17.9	5.4
	志学	53	71.7	18.9	0	41.5	45.3	17.0	73.6	3.8	52.8	28.3	9.4
	口羽	55	58.2	27.3	5.5	50.9	38.2	12.7	78.2	5.5	70.9	16.4	3.6
	持田	72	41.7	27.8	4.2	44.5	32.0	25.0	55.6	1.4	68.1	12.4	4.2
	中野	61	63.9	18.0	1.6	37.7	49.2	11.5	80.3	4.9	44.3	37.7	6.6
	吉田	75	50.7	28.0	4.0	41.3	44.0	17.3	69.3	2.7	53.3	24.0	5.3
	秋鹿	73	63.0	17.8	2.7	45.2	41.1	20.5	67.1	1.4	65.8	20.5	2.7
非農業女子	池田	27	85.2	3.7	0	66.6	22.2	29.6	59.3	0	51.9	29.6	3.9
	志学	25	68.0	20.0	4.0	52.0	32.0	24.0	68.0	4.0	76.0	4.0	12.0
	口羽	38	65.8	26.3	0	52.6	36.8	21.1	71.1	2.6	68.4	28.9	2.6
	持田	39	59.0	20.5	5.1	56.4	30.8	23.1	61.5	2.6	79.4	10.3	0
	中野	41	68.3	19.5	0	46.4	36.6	22.0	78.0	0	51.2	29.3	4.9
	吉田	46	76.0	13.0	2.2	52.1	36.9	41.2	47.7	0	73.8	17.4	0
	秋鹿	44	56.8	20.4	4.5	18.6	58.6	29.5	47.7	6.8	70.4	18.2	2.3

7.　概して農業者群に比して非農業者群が優れており，特に男子農業者群の保健認識の水準には問題がある。

8.　地区間差が比較的著明にあらわれており，地区保健活動推進のための地区の組織化が高度にすすんでいることや活動計画にもとづく実績の如何が保健認識の向上の背景をなしていることが事例的に観察された。

9.　学童のからだに対する保護者の認識は，全般に「わが子」に対しては評価規準を低める傾

向があるが，いわゆる低体位地区では「子どものからだ」についての関心が他地区に比していくぶん高くあらわれている。

10．学童の家庭における生活管理側面では，その関心や積極性が総じて女子非農業者群に高く，男子農業者群に低まる傾向がみられた。

11．学童のからだを中心として，その一般的知識や認知水準は必ずしも低いとはいわれないが，身近かな事項については不確実になる傾向がみられた。

V　結　　語

上述の各検討領域からの要約にみられるように，そこには自ずからほぼ共通した農村住民の生活様態や条件が抽象される。すなわち，農村における生活は全般にゆとりに乏しく，労働条件の不利とともに生活の時間的構造に特有の型を付与している。内容的に，本業以外の出稼，臨時雇など，いわば変則的労働生活の型は，こんにちでは最早一時的現象ではなくなり，恒常的な農村住民の就労形態として定着している。過疎化現象は従来の生活構造の均衡を内外の諸条件によって破綻・変革させた結果に他ならず，出稼・臨時雇の移行型からの分離を意味するものであり，一面，地区及び住民の生活機能を一層制約する結果にもなっている。

調査結果の検討から，このことがかなり明瞭に反映され，ひいては子どもの教育，生活乃至栄養管理，子ども理解の面に多くの解決すべき課題を提起しているように思われる。

また，考察によって示された諸特性が，性および職業による差など極めて原初的な条件によってそのちがいが規定されている。特に自発的活動の関与する諸領域では，思想，感覚の矛盾傾向があらわれやすく，消極的態度の源泉になっていることが示された。事柄の一般的認識はともかく，地区の課題認識において具体性を欠くことも，この傾向のあらわれとみてよいように思われる。

あ　と　が　き

1．要約にみられる結果の定位

現象としての学童の低体位性の理解の基盤を，それぞれの地区の生活条件及び住民の意識・行動などいわゆる生活構造の一部に求めた。しかし，この資料の示す限りにおいて低体位性に関連する顕著な特質は対象地区間にはみられなかった。しかしながら，課題設定で述べたように，本研究は体位発達に関与する直接条件を因果的，機械的に把握する意図をもって進められた訳ではなく，学童の地区生活の基盤を明かにするために，所与の条件の範囲でその実態の理解に重点が置れかたのである。学童体位の改善が，人々の意図的努力と対応する課題であるならば，当然その本質は生活構造全体の改善に在らなければならない。ここに学校および家庭の生活乃至教育機能と実践的に結びつく契機として考察の結果の位置づけができると思われる。

また，既述のように学童体位の優劣を機軸とする特性の抽出は困難であり，調査成績の実態

は必ずしもそれと平行していないことを示している。

しかしながら，学童体位の優劣の規準とは別に，ひとつの社会的アクション——例えば綜合地区保健計画にもとづく地区保健福祉活動——の事例において，地区の組織化及びその活動実績の歴史を背景としてみるとき，地区のレベルにおける諸特性が，いくつかの局面で積極的目的への指向を暗示する意味において顕著にあらわれているとみることができた。

学童体位の改善の問題は，当該地区の生活水準の全体的な向上と関連することは勿論であるが，これまでの考察にみられるように，具体的目標，計画設定にもとづく地区レベルでの組織の編成乃至再編成の意義が課題解決の方法を示すものとして提起されるであろう。

2．本研究は，共同研究者相互の協調によってすすめられた。とくに本稿における考察および要約の執筆は，「生活の時間的構造と余暇活動」については団が，「余暇におけるスポーツ活動の現状」の項は織奥が，「地区保健の実態」は福井が，そして「学童の身体発達に対する保護者の認識」については喜多村が，それぞれ中心になって分担し，基礎的・総括的作業は，共同討議のうえ福井が担当した。

参考文献

1．山陰村落の変貌と地域保健　福井・団　体育学研究 vol.11№.5 p.190　1967
2．山陰村落の変貌と地域住民の保健生活　和唐・福井・団・福岡　体育学研究 vol.11№.5 p.190　1967
3．地域社会の変動と学校体育の構造の相互関連的分析　福井・団・福岡・和唐ほか　体育学研究 vol.13№.5 p.p59—60　1969
4．いわゆる「体位向上施策」と地域保健　福井・団・喜多村　体育学研究 vol.14№.5 p.p188—189　1970
5．学童の低体位問題を中心にしてみた地区住民の保健意識の実態　喜多村・福井　第17回日本学校保健学会講演集　p.92　1970
6．学童の低体位施策に関する地区診断的研究　福井一明・喜多村　望　島根大学教育学部紀要　第4巻（教育科学）　昭和45年